年表

一、日高開発前史年表

年号		事項
斉明	五（六五六）	阿部比羅夫シシリコに入るという
文治	五（一一八九）	源義経衣川に死す、義経北渡の伝説これより流布す
長禄	三（一四五七）	コシヤマインの乱
永正	一二（一五一五）	ショヤコウシの乱
天正	一八（一五九〇）	蛎崎慶広豊臣秀吉と会見
文禄	二（一五九三）	慶広、蝦夷制書をうけ領主となる、場所制整う
寛永	一〇（一六三三）	ケノマイ、シブチヤリに金を産す
〃	一六（一六三九）	渡島知内金山に切支丹宗徒百六人を刑す
〃	二〇（一六四三）	フリース十勝より襟裳岬をのぞむ
正保	一（一六四四）	東金山に切支丹宗徒を捕う
慶安	一（一六四八）	沙流、染退アイヌ間に対立あり
寛永	九（一六六九）	シャクシャインの暴動おこる、この年鎮定す
天保	一〇（一七〇〇）	蝦夷島郷帳同図なる

年号		事項
享保	六（一七二一）	染退に採金
宝暦	一〇（一七六〇）	ロシヤ人北千島に来住すとの報至る
明和	七（一七七〇）	十勝日高のアイヌ相争う
天明	五（一七八五）	林子平三国通覧図説を著述
寛政	元（一七八九）	目梨アイヌの乱、はじめて日高に馬足を通ず
〃	八（一七九六）	英人ブロートン襟裳岬を望見す
〃	一〇（一七九八）	近藤重蔵日勝国境の山道をひらく
〃	一一（一七九九）	東蝦夷地を上知、請負人をやむ、運上屋を会所とす、油駒場所を様似幌泉の両場所に分つ、堀田仁助日高の沿岸を測定す、様似山道を切開、サルル山道を切開、浦河様似農業試作、近藤重蔵義経社をたつ、八王子同心ら沙流に畑を耕す、染退に銀を試掘するものあり
〃	一二（一八〇〇）	幌満に造船所をひらく、伊能忠敬来る、礼文華山道通じ馬陸路日高に入る
享和	一（一八〇一）	浦河神社創立
〃	二（一八〇二）	南部藩士様似山道修理、虻田有珠牧場開く
文化	一（一八〇四）	様似等澍院建立
〃	三（一八〇六）	百人浜に一石一字塔をたつ
〃	四（一八〇七）	南部藩兵三百人浦河に入る、元浦河の会所を浦河に移す
〃	五（一八〇八）	場所の詳細な調査行わる
〃	一〇（一八一五）	新に入札して請負人を決定す

〃	一一（一八一六）	広尾と幌泉の入会問題解決、幌泉住吉神社、襟裳稲荷神社創立
〃	一二（一八一七）	高田屋喜兵衛引退し金兵衛代る
文政	二（一八一九）	高田屋幌泉を請負う
〃	四（一八二一）	松前氏復領し日高は藩領となる
〃	五（一八二二）	山田文右衛門沙流を請負う
〃	一〇（一八二七）	高田屋金兵衛歿す
天保	四（一八三三）	高田屋没落す
安政	二（一八五五）	再度上知　松浦武四郎調査に来る
〃	四（一八五七）	浦川牧場開かる、元浦河で採金
万延	一（一八六〇）	山田文右衛門沙流に昆布礁をこころむ
文久	一（一八六一）	東西蝦夷地の人民に馬の飼育を許す
元治	一（一八六四）	各場所増運上金を命ぜらる
慶応	二（一八六五）	山田文右衛門の仕法告諭さる
〃	三（一八六六）	王政復古の令下る、蝦夷地平穏なり

二、日高開発創業時代年表

期	年	事項
函館裁判所	明治元	浦河牧場を廃止する
七月開拓使設置		
開拓使 二		東北北海道大凶作
		幌泉に沖の口番所をおく
		場所請負制を廃止する
		東久世通禧巡察
		会所を改めて本陣とする
		沖の口を海官と改め更に海関とする
		高田篤太郎新冠の御用達となる
		仙台藩民沙流に入る
		東部御親料規則公布
		小林重吉スクーナーを所有す
開拓使 三		幌泉の海関を廃止する
		蓑根藩民沙流に入る
		稲田士民静内に入る
		九洲の移民西舎杵臼に入る
		新冠の支配稲田氏にうつる
		分治を廃し本庁直轄とし三好清篤を主任に任ずる
開拓使 四		

期	年	事項
開拓使 五		東北の自移民二百戸幌泉に入る
		幌泉の御用達を杉浦嘉七に下命
		日高支庁設置
		新冠牧場を設置
		本陣の称をやめ旅籠屋といゝのち駅逓所とす
		三石の小林重吉を漁場持にする
		山田栄六静内新冠の漁場持となる
		木村万平天草の漁民を浦河に入稼させる
六		北垣国道赴任し大いに画策す
		広尾より西舎にしじみ貝を移殖す
七		支庁をやめて本庁に合す
		大小区画をなす、正副戸長を任命
		ホラシ・ケプロン日高巡視
		幌泉の中沢徳兵衛鮭あみをはじむ
		放馬取締の令達出る
八		杉浦嘉七幌泉より引あげる
		九州移民に二漁場を付与
		郵便線路通じ郵便局開業

	稲田移民に漁場付与、アイヌに昆布場割渡
	互野留作平賀に米作を創始
	東部諸郡の昆布場をアイヌに下付す
使 九	幌泉漁民に貸付の官金付与さる
	細野青山新冠の漁場持を命ぜらる
	森田安左衛門幌泉に四方店を開く
	大洪水特に沙流川甚だし
	広業商会昆布資金を貸付
	郡役所制をしく、大字名を定める
	小林重吉三石に海員学校をひらく
開拓 一〇	新冠牧馬場と命名す
	小林重吉三石に刻昆布製造をはじむ
	佐瑠太移民米作をこころむ
	鹿業盛んとなる
一一	各大字より総代人を公選す
	静内移民に藍麻規則を公布
	新冠に狼群あらわる
一二	浦河燈台点燈
	郡区編成法により二郡役所分治
	西舎杵臼移民米作をはじむ
	春に大雪、鹿群全滅にひんする

	ジョン・バチエラー平取に入る
	九州移民尾田木巣授賞さる
使 一三	郡区総代人を公選し官選の戸長をおく
	昆布繁殖のためごも草刈を命ず
	岩根牧場開設
	蝗群十勝より侵入
開拓 一四	赤心社移民入植
	汽船はじめて浦河に入港（弘明丸）
	工藤作助平取に牧牛場をつくる
	牛はじめて三石以東に入る
	依田勉三通過
	侍従片岡利和新冠を巡視
二月廃使置県	赤心社第二次移民浦河に入る
	札幌県に属する
札幌県 一五	新冠牧場農商務省に属す
	汽船金龍丸幌泉に定期航海す
	侍従藤波言忠新冠巡視
一六	西郷農商務卿新冠、赤心社巡視
	新冠牧馬場を宮内省に移す
	国道三等と指定す
	浦河に昆布製造改良組合をつくる
	小松宮新冠平取を巡視
	旱魃、秋に出水、赤心社移民なやむ

札幌県 一七	赤心社牧場をはじむ
	赤心学校を設置
	安場保和巡視
	電信線通ず
	七月大暴風雨あり
	夏に冷濕、蝗虫多く死す

札幌県 一八	静内郡ルベシベに兵庫団体入地
	アイヌ勧農事業はじまる
	霖雨あつて蝗虫全滅す
北海道庁 一九	一月廃県置庁

三、自明治十九年至現在　日高開発史年表

年度	記事
明治一九	○北海道庁を設置
	○岩村通俊長官に任ず
二〇	○浦河外六郡役所設置
	○英人メーク浦河港を測量す
二一	○浦河に林務課員派出所をおく
	○松浦武四郎歿す
	○市父孵化場設置
	○日高馬市会社開業
二二	○日本昆布会社成立
	○燃裳燈台点燈す
	○永田方正日高のアイヌ地名を調査、二四年地名解発行
二三	○春立の佐野己次郎改良川崎船にて沖合漁業を開始
	○歌笛開拓
	○日高教育会創立
二四	○アイヌ授産を終了す
	○浦河、幌泉燈台点燈
	○八田満次郎沙流奥地に入り幌去、貫気別開拓
	○ジョン・バチエラーアイヌ語辞典を著す（平取語を主とす）
二五	○北垣国道長官に任ず
	○渡辺伊平に藍綬褒章を授けらる
	○久松義典北海道通覧を著す（日高の記事あり）
二六	○久松義典北海道実測図（五十万分一）成る。
二七	

二八
○大塚助吉豊平号の貸付を受く
○佐瑠太橋架橋
○平和克服し景気よし
二九
○新冠の古川足私費を以て土人学校を建つ
○西舎製軸工場操業
○三陸海嘯の余波及ぶ
○浦河支庁を設置
三〇
○浦河税務所、浦河地方裁判所を設置
○浦河に大小豆改良組合出来る
三一
○未曾有の大洪水被害多し
○山高江に私立土人学校設置
三二
○旧土人保護法発布
○平取村分村
○浦河の西川義三郎鰹節を試製す
○北海道殖民状況報文日高国発刊
○ミスブライアントはじめて平取に入る
三三
○浦河外六郡農会なる
○黒田清隆歿す
三四
○第一期拓殖計画なる
○北海道会法発布
○田中仙次郎第一回道議に当選
○閑院宮行啓
○西忠義支庁長に任ず
三五
○平取に庁立土人学校開設
○日高実業協会結成
○ウサツブ、イヲチシ殖民地区画測設
○浦河外三ヶ村組合役場設置(二級)
○浦河及沙流産牛馬組合なる
○幌泉の林重吉歿す
○幌満に日高製材会社操業
三六
○日高国標及銘なる
○高静校長大脇炊二、道庁長官の表彰を受く
三七
○日高産牛馬組合なる
三八
○右左府視察団壮挙
○目曲久助チロロに入る
三九
○様似、三石、幌泉各村二級とする
○静内橋竣成
○定期船浦河に寄港す
○金田一京助はじめて研究のため平取に入る
○佐瑠太に奥山製軸工場操業す
四〇
○日高種馬牧場設置
○風間源作団体をむすび右左府に入る、右左府開村
○二風谷校の黒田彦三道長官より選奨さる
四一
○馬券禁止され日高の産馬に影響多し
○沢茂吉歿す
○浦河大火

四二
○韓国皇太子行啓
○西忠義門別山道に遭難
○西忠義小樽支庁長に転ず
○門別二級村となる
四三
○荻伏村独立し二級村となる
○荻伏村内務大臣の表彰を受く
○河島十五年計画により道政を開始す
○塚本博愛道会議員に当選
○王子製紙会社苫小牧工場竣工
○飯田信三藍綬褒章を受く
四四
○皇太子行啓
○王子製紙会社の鉄道佐瑠太に延長す
四五
○苫小牧佐瑠太間軽便鉄道一般営業線となる
○様似大火
大正元
○自動車初めて入る
二
○冷害凶作
○浦河の堺頼吉第五期道会議員に当選
○日高に始めてクローム鉱発見される
○沙流土功組合設置
○波恵(門別)用水土功組合成立
○門別用水組合成立
三
○五十嵐佐市衆議院議員に当選
○関崎不二夫浦河支庁長に就任
四
○浦河村を浦河町と称し一級町村制施行
○浦河町大字名を改める
五
○三石の坂東秀太郎第六期道議会に当選
六
○那須正夫浦河支庁長に就任
○浦河に日高電灯株式会社営業開始
○東武衆議院議員に当選
七
○「平取外八箇村誌」刊行
○日高水産組合設立
○高静小学校に裁縫補習学校附設
○浦河の小林哲太郎「日高民報」創刊
八
○支庁々舎新築
○平取村より右左府村を分村
○日東クローム鉱業株式会社創立
○厚賀、門別、富川に火力による点灯
○造田五ヶ年計画樹立
九
○栗林五朔衆議院議員に当選
○日高自動車株式会社設立
○拓殖事業拡張計画実施
○延出、荻伏東部、佐瑠太、静内、厚別、右左府、二風谷、平鵜、杵臼に土功組合成立
一〇
○近藤喜寛浦河支庁長に就任
一一
○高井高次郎浦河支庁長に就任
○大洪水

一二
○浦河に日高高等国民学校創立
○右左府村二級町村制施行
○平取村二級町村制実施
○新冠村二級町村制実施
○手代木隆吉衆議院議員当選
○沙流上流に土功組合成立
○高井高次郎留萌支庁長に転任
一三
○吉田正一浦河支庁長に就任
○静内村一級町村制施行
○北日本自動車株式会社設立
一四
○荻伏小学校に愛荻舎農場を附設
一五
○荻伏村酪農組合組織
○浦河青年訓練所設置
昭和二
○荻伏村に共同製酪所設置
○振内に八田鉱山事業開始
○第二期拓殖計画実施
三
○三石村市街字名を改称
○日高畜産組合設立
○日進自動車株式会社平取—荷負間営業開始
○浦河に貯水池を設く
○茶谷幸一浦河支庁長に就任
四
○浦河港竣工
○浦河町一級町村制実施

五
○浦河の日高高等国民学校、浦河実業専修学校と改称
○勇払電灯株式会社水力発電を開始
○守谷癸清浦河支庁長に就任
○森本正雄浦河支庁長に就任
六
○門別村一級町村制施行
○静内村町制実施
○凶作
○「三石村郷土史」刊行
七
○門別村・富川村に水道を設く
○浦河に西神社建立
○水害凶作
○浦河支庁を日高支庁と改称
○帝国鉱業株式会社本倉鉱山を開発
○浦河青年訓練所と浦河実業専修学校を統合して浦河青年学校とする
八
○「新冠村郷土史」刊行
○永山政能日高支庁長就任
○前田豊次郎日高支庁長に就任
○三陸津波の余波をうける
○様似村特別指導町村に指定
○歌笛村に集乳所設置
○「西忠義翁徳行録」刊行

九
○幌満に北海電気株式会社第一発電所完成
○日勝道路全通
○門別台地に由仁団体十七戸酪農村建設の目的にて入地
○凶作
○静内町大字名を廃し新字名を撰定
○平取村義経神社境内にアイヌ人ペンリウの碑建立
○浦河町大字名を廃し字名を改称
○静内一帯津波襲来
○風水害に見舞わる
○道第二期拓殖計画改訂意見書を提出
○荻伏村に開拓功労者沢茂吉、鈴木清、西忠義の三胸像建立
一一
○静内農業学校開校
○門別村字名を改正
○三石村大字を廃し十九字を新称
○坂東秀太郎第十五代道議会議長に就任
○静内町吉田貫一第十一期道会議員に推される
○町立浦河実科女学校設置
一二
○赤松克麿、手代木隆吉、北勝太郎、岡田春夫、南条徳男衆議院議員に当選
○日高線一四四粁全通
○「様似村誌」刊行

一三
○平取村市街地に始めて点灯
○野々瀬恵一郎日高支庁長に就任
○農地調整法公布
○三石村一級町村制実施
一四
○日振勝漁船保険組合設立
○アポイ岳高山植物郡落天然記念物に指定
一五
○幌満の北海電気株式会社第二発電所竣工
○「歌笛開村五十年史」刊行
○織田信知日高支庁長に就任
一六
○様似の北海道電気興業株式会社日高工場操業開始
○様似村字名を改正
○国民学校令発布
○庁立静内農学校開校
一七
○翼賛選挙施行
一八
○古屋裕日高支庁長に就任
○右左府村を日高村と改名
○国営自動車日勝線開通
一九
○幌満のゴヨウ松自生地天然記念物に指定
○沿岸防禦工事強化さる
二〇
○農地開放に関する指令発布
○都市疎開者の就農に関する緊急措置要綱閣議決定
○緊急開拓事業実施要綱閣議決定
○襟裳方面米軍艦砲射撃を受く

二一　○自作農創設特別措置法公布
○終戦後第一次地方制度改正
○大塩紀日高支庁長に就任
○平取村一級町村制施行
二二　○新冠御料牧場農林省所管の新冠種畜牧場となる
○吉田栄吉日高支庁長に就任
○総選挙施行
○土橋武士日高支庁長に就任
○門別の棚川忠雄第十三期道会議員に当選
○地方自治法公布
二三　○教育委員会法公布
○道教育委員公選
二四　○総選挙施行
○川崎久輝日高支庁長に就任
二五　○様似郡一部、幌泉郡全部、広尾郡一部道立公園に指定
二六　○門別村町制施行
○門別町富浜シノダイ岬旧競馬場附近米進駐軍の高射砲射撃場及び連絡飛行場として接収される
○シベチャリの砦址（チャシコツ）道教委より史蹟に指定
二七　○「荻伏村七十年史」刊行
○三石村町制施行
○佐々木茂一日高支庁長就任
○十勝沖大地震
○総選挙施行
○平取村開村五十年式典挙行
○様似村町制施行
○各町村に教育委員会設置
○「平取村開村五十年史」刊行
二八　○「荻伏村七十年のすがた」刊行
○北海道開発庁総合開発五ヶ年計画
○総選挙施行
○西忠義翁記念碑建立

（終）

あとがき

道内だけについて言うと、私は文字通り足跡到らざるなしというくらい、隅々まで歩き廻っているつもりだが、日高だけは未見の土地であつた。ところが昨春日高開発史の編ざんをお引受けすることになつたので、はからずもこの未見の地に足を踏み入れる機会に恵まれた。春とは言つても、まだ肌寒い五月初旬であつたが、暖流沖を走る日高路は、流石に春色浅からぬものがあつた。車窓から見はるかす日高の海は、うらうらとした陽ざしに輝やき、銀冠をいただいた日高連峰を背景とする野や丘は、すでに若々しい緑に彩られていた。車中で向かい会つた旧土人の高校生の人なつつこい瞳や、浦河の町で見た行きずりの乙女のほゝえみにも、日高の良さが汲み取れるような気がして愉しかつた。

日高は本道の中でも気候が割合い暖かであるのと天産の豊かな点で、相当古い時代から和人も入り込み、松前藩でもこれを重要視したことが史実に明らかである。特に開拓使の初期においては、北垣国道のような有能な役人を派して、この地方の開発行政に当らせたのであるが、その後内陸における鉄路の発達によつて開拓の重点は他の奥地に向けられ、日高は何時か取りのこされた形になつてしまつた。

しかし世間は何時までも、この宝蔵を放置しておく筈はない。果して戦後いくばくもなく北海道総合開発の烽火が上がると、日高は忽ち強い脚光をあびて開発の中心舞台に躍り出たのである。今や日高はあらゆる面で、大きくしかも力強く伸びるためのはげしい陣痛を続けていると言つてよい。丁度この時日高支庁創基八十年を迎え、記念の意味をこめて本書の刊行を企画され、編ざんの任を私に嘱せられたのである。

本書が比較的短かい期間に、どうにか完成の運びになつたのは、もとより資料蒐集その他万般の点で深き御理解と御協力をおしまれなかつた支庁当局のお蔭と肝銘に堪えないが、また一面終始私を助けてくれた札幌市北辰中学校井黒弥太郎君の誠実変らざる御協

力を忘れることはできない。

完稿にあたり、こゝに改めて長沢支庁長、佐々木前支庁長、伊藤次長、塚越総務課長はじめ関係諸賢の御寛容と御厚意に対し深甚の感謝をいたし、なお最良の助力者井黒弥太郎君に満幅の謝意を表する。

昭和二十九年三月

北海道史料編集長　橋　文七